

ポジティブ・シンキング（『下商新聞』、令和3年7月20日）

校長 久保田 力哉

コロナ禍で2回目の新年度を迎え、はや一学期も終了しようとしています。6月末現在、山口県内では、感染拡大が小康状態あるとは言え、私たちの生活には今なお多くの制限が求められています。

本年3月の日本財団による「18歳意識調査」結果によりますと、調査対象者の半数以上が今の暮らしに閉塞感を感じており、さらにオンライン授業などを体験した人の七割以上がストレスを感じたと回答しています。

このように、生徒たちは今まで経験したことのない事態に大きな不安やストレスを抱えながら、日々の学校生活を過ごしています。

これまで、私も校長として学校教育の様々な場面で対応策を講じてまいりましたが、その中で常に意識してきたことは「ピンチはチャンス」という考え方で臨むことです。

「ピンチ (pinch)」とは、窮地、厳しい状況、危機のことです。一方、「チャンス (chance)」は好機、良い機会のことです。つまり「ピンチはチャンス」とは、「厳しい状況こそ、リスタートするのに絶好の機会」であるということです。

また、「ピンチはチャンス」は「ポジティブ・シンキング(positive thinking)」と言い換えることもできます。これは、前向きで積極的な考え方を表しており、「プラス思考」という言葉でも表現されています。

今回は、下関とも縁の深い高杉晋作の詠んだ句を紹介しながら、このポジティブ・シンキングについて考えてみたいと思います。

高杉晋作は、天保10年（1839年）、現在の萩市に長州藩士、高杉小忠太の長男として生まれました。晋作は剣術でその才能を大いに発揮するとともに学問にも熱心に取り組み、藩校明倫館で学ぶ一方で松下村塾にも通って頭角を表し、久坂玄瑞と並んで「松門の双璧」と称されるなど、秀才の名を欲しいままにしました。残念ながら、晋作は大政奉還を半年後に控えた慶応3年（1867年）の春、27歳で夭逝しました。

晋作と下関の縁は、文久3年（1863年）に遡ります。この年、晋作は下関を外国艦から防備するため奇兵隊を結成しました。奇兵隊は武士以外でも志があれば入隊を許した、画期的な組織となりました。この後、下関戦争及び事後処理、功山寺挙兵、四境戦争、小倉戦争、そして終焉の地となるなど、晋作と下関は切っても切れない関係にあり

ました。

ちなみに、下関市出身の郷土作家である古川薫さんの小説によると、今では下関や山口のみならず、日本を代表する偉人として称えられている晋作ですが、初めから下関の人々の評価が高かったわけではありませんでした。というのも、晋作は当初、長州藩の本藩である萩藩が馬関周辺の直轄地化を画策するために送った使者と認識されていたからです。そのため、長府藩からは刺客が送り込まれており、晋作はこれから逃れるため偽名を使って下関市内に潜んでいたと言われていました。

ここで、晋作の辞世の句と言われるものを紹介します。

おもしろき こともなき世に おもしろく

私はこれを、「面白いことなどない世の中も、面白くできるかどうかは自分次第である」と解釈しています。自分の人生は、最終的には自身の考えや行動にかかっているという意味であると思います。

次に、もう一つの説を紹介します。

おもしろき こともなき世を おもしろく

先の句からたった一文字変わったのですが、私にはこの句の方がより積極的で主体的なものに思え、「面白いことなどない世の中であるが、自分から面白くしていこう。」と読み取っています。皆さんはどうでしょうか。

さらに、この句には野村望東尼(ぼうとうに)が詠んだと言われている下の句があります。

野村望東尼は、文化3年(1806年)現在の福岡市に藩士の三女として生まれ、幼い頃から文学や和歌に親しんだと言われています。望東尼は勤王活動が仇となり、60歳のとき島流しにされてしまいましたが、晋作の命を受けた尊王攘夷の志士たちに救出されたことが縁となり、その後病に倒れた晋作の最期を看取ったと言われています。

住みなすものは 心なりけり

これは、「面白いことなどない世の中を面白く暮らすのは、それぞれの心持ち次第である。」という意味になります。つまり、どのような世の中であれ、最終的には自分の心構えや考え次第でどのようにでもなるということだと思えます。

もう一つ余談ですが、この両説は晋作直筆による歌が残されていないため、どちらが正しいかは不明です。なお、東行庵の句碑には「に」とあり、防府天満宮の歌碑では「を」となっています。また、前出の古川薫さんの著書では、「を」が採用されていま

す。

ここまで、いささか精神論に偏ってしまった感がありますので、閑話休題、コロナ禍を乗り切るための具体的行動について紹介したいと思います。

新型コロナウイルス感染防止に向けて、全国の自治体は様々な取組を実施していますが、中でも飲食店を中心とした感染対策に特に頭を悩ませています。

そのような中、注目を集めているのが、現地調査に基づいて独自に認証する「山梨モデル」です。

山梨モデルでは、飲食、宿泊など四業種を対象に 50 項目程度に及ぶ基準が設定されており、飲食店では「座席の間隔を最低 1 メートル以上確保する」「大皿は避け、料理を個々に提供する」などの項目について、事業者の自己申告に加えて、調査員が実際に現地調査でチェックをしています。

認証された施設の利用者や従業員の感染事例のうち、店内での感染が認められるのは極めて少なく、山梨県の担当者は、「対策を取れば一定の効果がある。」と分析されています。

専門家等によるこの取組への高い評価を受け、政府は5月上旬、ウイルス感染防止策を強化するため、飲食店が実施している対策を第三者が認証する制度を導入するよう、全国の都道府県知事に通知しました。具体的な対策の基準案としては、座席の間隔確保やパーティション（アクリル板）設置、換気の徹底等の項目に加え、従業員による来店者への積極的な呼び掛けや、手指消毒の実施等も盛り込まれています。

この取組のコンセプトは、「感染症対策と経済を両立させる」ことにあります。また、従来の取組が、「休業要請をかけ、それに対して補償を出す」という一時的な対策が主流であったのに対し、山梨モデルは、「一つ一つ感染防止対策を積み上げていく」という持続的な対策であると言えます。

このように、地方でスタートした取組が全国へと広がりを見せていることには、大きな意味があると思います。

ここでは公的な取組を紹介しましたが、私たち一人ひとりのちょっとした心掛け次第ですぐに実践できるものも多くあります。

防災対策の3要素として「自助・共助・公助」があげられますが、コロナ対応においても公的な支援（公助）を待つだけでなく、自らがなすべきこと、つまり自分で自分を守ること（自助）を行い、そして地域やコミュニティといった周囲の人たちが協力して

助け合うこと（共助）も大切です。

以下に、厚生労働省が示す感染予防のための具体的行動について、要点のみ掲載します（「厚生労働省ホームページ」より一部抜粋）。

【新型コロナウイルス感染予防のために】

- 咳エチケットと手洗い
- 三密を避ける
- 新しい生活様式の実践
- 熱中症に注意
- 接触感染に注意
- ・手洗いの五つのタイミング
 - ①公共の場所から帰った時
 - ②咳やくしゃみ、鼻をかんだ時
 - ③ご飯を食べる時
 - ④病気の人をケアした時
 - ⑤外にあるものに触った時

いかがですか。これらのことは、今この瞬間からでも実践できることばかりです。

コロナ収束には、今しばらく時間が必要な状況ではありますが、このような時にこそ、「住みなすものは心なりけり」というポジティブ・シンキングで、具体的な行動を実践しながら、皆で力と知恵を合わせてコロナを克服していきましょう。